《特集》グルックの《オルフェーオとエウリディーチェ》

2022 年 12 月 18 日に早稲田大学総合研究機構オペラ／音楽劇研究所の主催で「グルック・シンポジウム：オペラ《オルフェーオとエウリディーチェ》とその周辺」が開催されました。本特集は、そこでおこなわれた研究発表を起点として組まれたものになります。本シンポジウムは当研究所内の「バロック・オペラ」ワーキンググループのメンバーが中心となって企画し、会場とオンラインのハイブリット形式で、また演奏者にも協力を仰ぎ、研究発表内容に連動する実演も交えて実施されました。

クリストフ・ヴィリバルト・グルック（1714-1787）は、バロック・オペラから近代的なオペラへの転換期において、「オペラ改革」を行った作曲家として知られています。台本作家であるラニエーリ・デ・カルツァビージ（1714-1795）とともに、1762 年に《オルフェーオとエウリディーチェ》をウィーン・ブルク劇場で発表しますが、この作品が改革オペラの第 1 作になります。グルックとカルツァビージは、台本作家ピエトロ・メタスタージオ（1698-1782）によって規則化された、オペラ・セーリアの台本の複雑さを見直し、オペラの黎明期のようなシンプルな作劇をめざしました。そのため、レチタティーヴォとアリアの区別をなくして物語を終始オーケストラで進行し、過剰な装飾を伴うコロラトゥーラを排除しました。一言で言うならば「簡素化」です。グルックらの改革は、オペラの歴史においてすぐに実を結んだわけではなく、その理念が本格的に理解されるのはまだ先になります。しかしながら、ヴァーグナーから高い評価をされ、彼に影響を与えた点でオペラ改革の重要性は論を俟たないでしょう。

シンポジウムの前半は、《オルフェーオとエウリディーチェ》の作品概要およびオペラ改革の概略に関する報告のあと、「簡素化」をキーワードに各個人発表が有機的に結びつく形で進められました。まず、大崎さやの氏によって台本面での考察が取り上げられ（本誌掲載）、続いて、同時期に起こったバレエ改革でもその理念が共通していることに言及する発表や、改革以前と以後で同じ題材を扱ったグルック作品における改革意識を考察する発表が行われました。

《オルフェーオとエウリディーチェ》は 1762 年のウィーン初演後、ヨーロッパ各地において様々に改変された形で上演されています。シンポジウム後半では、同時代のイギリス、ドイツ語圏、ロシアにおける事例が取り上げられました。まず 1770 年のロンドン上演が挙げられますが（ロンドン版）、これは一部パスティッチョの形で上演されており、その上演事情や改変を吉江秀和氏が取り上げました（本誌掲載）。さらに 1773 年にはミュンヘンでも上演され（ミュンヘン版）、こちらもロンドン同様ローカライズ

のひとつです。そのケーススタディが大河内文恵氏によって行われました（本誌掲載）。またロシアに関しては、イタリア語のみならずフランス語の改革オペラの農奴劇場における上演が言及され、最後に《オルフェーオとエウリディーチェ》の映像作品について、その演出コンセプトや受容に関する発表が行われるなど、多方面から本作へのアプローチが試みられました。

今回ご投稿いただいた 3 名の論文・研究ノートは、発表時よりもさらに広範で深い考察・知見が加えられたものになっております。シンポジウムに当日ご参加いただけなかった方々にも研究所雑誌の特集という形で共有できますことを心よりうれしく思います。

（編集委員　萩原里香）